「第11回日本言語文化学研究会発表要旨」

会話授業における客観的な授業分析の試み

菊池民子　猪狩美保

(1995.12.9 発表)

I．はじめに

教師として日本語の授業を行う際、自分の授業をよりよいものに変えていこうとする姿勢を持ち続けることが重要である。その為には授業観察が必要であり、自分自身の授業をそれまでとは違った視点から観察することで授業を変えるきっかけがみつけられると考える。

II. 研究目的と対象

今回の試みでは授業を変える手段としてまず授業を客観的に記述し、次にそれを一定の分析方法を使う事によって何らかの特徴的パターンを見つけだし、改善の方法を探ることを目的とする。対象とした授業は、メルボルン大学Japanese 2Aの会話授業　2クラス。学習目標は①レストランでの注文、②レジと支払い、③苦情を言う。学生数は授業例1:15名(日本滞在経験者)、授業例2:17名。教案は学習目標①②には2クラスとも同じ教案、③に対しては4種類のスクリプトを用意した。

III. 分析方法とその採用経過

①全体的な教師と学習者の発話量を比較するために、授業例1、2とも最初の10分間(学習目標①の導入から学習者によるペア練習まで)をFLintシステム(Foreign Language Interaction System)を用いて分析。

②導入部分のスクリプトの説明55秒を取り出し、FOCUS(Foci for Observing Communications Used in Settings)を用いて分析。

[採用経過]

① FLint システムによる教師と学習者の発話量の比較：授業例 1=67.9%/32.1%,　授業例2=68.4%/31.6% ⟶ 学習者の発話量が少ない

②会話の授業では学習目標の習得だけでなく、全ての場面で学習者からの発話を促し、練習の場とすると考える。今回、特に教師の発話が多くなるスクリプトの説明の部分を取り出し、FOCUSで分析。

③FOCUSを採用することによって、教師、学習者の一回の発話や行為に対して5つの視点から観察できる。特に、自分では気づきにくい動作や

視覚的手段をカバーし、それがどのように使われるかの視点が得られる。
④ FOCUSにおける５つの視点とは、1)Source/Target（コミュニケーションの方向）、2)Move（コミュニケーションの目的）、3)Medium（コミュニケーションの手段）、4)Use (Medium がどのように使われるか)、5)Content(何を伝えるか)である。

IV 分析結果

1．Source/Target

発話者	T			S	
S/T	T/C	T/S1	C/T	S1/T	C/0
授業例1	9	3	1	7	3
授業例2	14	5		6	5

＊授業例１と２を比べると２のほうがＴの発話の数が多くなっているが、ＦＯＣＵＳの分析では発話の数＝発話の量とはならない。つまり同時間内の発話でも、２～５の視点のサブカテゴリーの種類が多ければ発話の数が増えることになる。

＊ＳではＣ／Ｏの割合が高く、コミュニケーションのためのパフォーマンスが少ないことが分かる。

注：Ｔ＝ｔｅａｃｈｅｒ（教師）　Ｓ＝ｓｔｕｄｅｎｔ（学習者）　Ｃ＝ｃｌａｓｓ（クラス）　Ｏ＝ｏｔｈｅｒ（その他）

2．Move

発話者	T			S		
目的	sol	rea	res	sol	rea	res
授業例1	3	9		2	7	2
授業例2	5	14		(1)	6	5

＊授業例２では、Ｔのｓｏｌに対し、Ｓのｒｅｓを引き出し得ているが、それ以外のインターアクションはＳの反応を要求しないｒｅａとなっている。一方授業例１では、Ｓの自発的なｓｏｌを引き出している。

注：ｓｏｌ＝ｓｏｌｉｃｉｔ（質問、命令、要求）　ｒｅａ＝ｒｅａｃｔｉｏｎ（すべてのコメント）　ｒｅｓ＝ｒｅｓｐｏｎｓｅ（返答）　ｓｔｒ＝ｓｔｒｕｃｔｕｒｅ（枠づけ）

3．Medium

発話者	T				S			
手段	l+n+p	l+p	l+n	l	l+p	p+n	l	p
授業例1	3	7	2		4	2	4	1
授業例2	3	2	7	7	1	4	5	1

注：l＝linguistic（口頭・視覚言語）　n＝non－linguistic（絵、実物教材など）　p＝para－linguistic　（動作など）

4．Use

発話者	T					S				
Use	p	c	r	a	rp	p	c	r	a	rp
授業例1	6	2	4			4	3		3	1
授業例2	8	7	4			5	1		5	

＊授業例１、２ともにＳのｃ，ｒが少ない。ａのかわりに、ｐ，ｃ，ｒを増やせば、Ｓに考えたり判断したりするチャンスを与えることになる。

注：ｐ＝ｐｒｅｓｅｎｔ（質問、陳述などの提出）　ｃ＝ｃｈａｒａｃｔｅｒｉｚｅ（特徴づけ・判断）　ｒ＝ｒｅｌａｔｅ（説明・関連づけ）　ａ＝ａｔｔｅｎｄ（内容のあることをコミュニケートしない）　ｒｐ＝ｒｅｐｒｏｄｕｃｅ（繰り返し）

5．Content

発話者	T			S		
Content	s	l	p	s	l	p
授業例1	10		2	11		
授業例2	19			11		

＊分析した場面ではその日の学習項目についてのみ触れており、Ｓの一般的知識や個人的情報には言及していない。

注：ｓ＝ｓｔｕｄｙ（学習）　ｌ＝ｌｉｆｅ（一般的知識）　ｐ＝ｐｒｏｃｅｄｕｒｅ（手続き）

Ⅴ 考察

特徴的なパターンを取り出してみる。① Move の視点から見ると、ほとんどのＳの発話はＴからの solicit に対するもので、その後Ｓの response

の後、Tの reaction が数回続く。②Sの response の後、Tはそれについての判断を行うだけでその後の発展が見られない。③ Use の視点から見ると、Sの reaction は積極的なコミュニケーションを必要としない attend が多い。これらの自己観察から代替案を考えてみる。

授業例１：Sからの意味を問う質問に対してS自身が答を探れるようなUseのc、rを引き出してS/S,S/Cに発展する可能性を作る。

授業例２：Tの繰り返しを避け、その代わりにSから Content の１や Use の c、r の発話をふやす可能性を作る。

VI まとめと今後の課題

今回、授業の記述を正確に行い、それに客観的な授業分析方法の一つである FOCUS を使うことによって授業例１と２の比較やパターンの抽出を行った。これにより改善すべき点のいくつかが明らかとなり、さらに学習者の日本滞在経験の有無という差を考慮した代替案を考える過程まで辿ることができた。実際に代替案を実行してみる機会はなかったが、今後授業をする際の教案作成に生かす事ができると考える。こういった分析方法だけで授業の全体的な評価を可能にするとは考えにくいが、反面、教師が気付きにくい点が明らかになるという利点がある。今後、教師がひとりでも行える自己研鑽のための一つの手段として、他の分析方法とも比較検討しながら利用していきたいと考える。

〈主な参考文献〉

Chaudron,C(1988):*Second Language Classroom-Research on Teaching and Learning.* Cambridge University Press.

Fanselow,J(1977):Beyond Rashomon. TESOL Quarterly 11:17-39

(1987): *Breaking Rules-Generating and exploring alternatives in language teaching.* Longman, NY.

文野峯子(1991):「授業分析と教育の改善—客観的な授業分析の試み」『日本語教育』75 号、pp51-63

元永(上田)晶子(1992):「授業の自己分析」『The Language Teacher』XVI(12):19-22

(お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士１年)